
これはテンプレですか？ いいえ、銀のプレートメール略して銀プレです

さんすべりあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これはテンプレですか？ いいえ、銀のプレートメール略して銀プレです

【Nコード】

N2046Z

【作者名】

さんすべりあ

【あらすじ】

警察官になって、はや2年。毎日あいさつしてくれる女の子に告ったある日、事件現場で殉職しました。 やっぱりあれは死亡フラグだったのか。 そうだよな、オレが幸せなんてヘンだもんな。 二階級特進バンザイ（泣）。 生まれ変わった先は、いわゆる剣と魔法のファンタジー世界でした。 ホームズ好きの妖精にとり憑かれつつ、めざせ、魔法警官。 いや、その前に成長しなくちゃだけど。

プロローグ(前書き)

気楽に書こうテンプレシリーズ第二弾。

もっとも、第一弾とはぜんぜんつながりません。

独立して読めます。

よろしくお願いします。

プロローグ

通勤通学の皆さんが、駅や学校に向かって行き交っている。

そんな中、オレは一日おきに交番の前に立つ。市民を見守るのは、警察官として大切な仕事である。

「見守るっていうか、見てんのは冬ちゃんだよなー？」
先輩がからかうが、オレは固い表情を崩さない。崩れない。崩せない！

手には汗がダラダラ。
緊張で顔は硬直^{じじちやく}。

……さすがに朝日の中、自分が一番不審人物なのは自覚している。

「おう、来たぞ」

先輩が、ドンと背中を押した。よろけるオレに代わり、見張りを勤め始める。

「おはようございます」

いつもと同じ笑顔が目の前にあった。

江上冬さん^{えがみ}。天然ぼやぼやの、騙^{たま}されやすそうな1年生。背が小さいので一見中学生だが、彼女の制服は南東北高校、通称西ナシ高のもの。

しかもオレは平日毎日見ているので、お子様と間違えるはずもない。

ん？ なんで毎日？ 非番があるだろうって？

甘いな。オレは休みでも朝来ているのだ。彼女の挨拶^{あいさつ}にはそれだ

けの価値がある！

「お、おはようございます。あ、あの」

なぜか敬語。しかも返事が上ずってしまっ。

「お、お話が……。ち、ちよつとこちらに来てもらえますか」

「え。私、警察に取り調べられるような事しました？」

本人は不思議そうに目を丸くしたただけだったが、周りがざわめいた。(えー何なに)(万引き?)(スマホで撮つとくか)など、予想外に不穏な方向へ進んでいく。

まずい。このままでは、オレが冬さんを無実の罪に陥れてしまっ！

オレは覚悟を決めた。

「ちちち違っんです。話というのは、つまりですね、もももしよければ本官と付き合っして下さい！」

今度は、おおつとどよめきが上がった。

よし、冤罪回避。

それはいいのだが、告白したのは初めてだ(された事はナイ)。頭に血が上つて、立ちくらみのようにクラクラふらふらしてくる。もういい。言うだけ言った。我が生涯に一片の悔いナシ。だから、断るなら早くして欲しい。

さすがにここでブツ倒れるのは恥ずかしいので踏ん張っていると、冬さんは困った笑顔になって首をかしげた。

ああ、やっぱりな。

町内おばちゃんたちの噂では彼氏はいないってハナシだったが、

そう上手くいくわけがない。いつでも来い、と覚悟はするが、オレの肩はガツクリ落ちていた。

頼むから、優しく断ってくれ。キモイとか言うのなしで。本気でへこむから。

「あ。違うんです。お巡りさんはいい人だと思います。挨拶してくれますし。ただわたし、よく知らないから、あの、お友達から聞いてですか……？」

遠慮がちに訊ねる姿は、地味だが可愛い！

「はい！ では自己紹介をさせていただきますっ。本官は西岡勇太郎といい、現在20歳。貯金ナシ彼女ナシの不甲斐ない男ですが、剣道は全国大会で入賞の腕前です！ ぜひ冬さんを守らせて欲しいのでありますっ！」

あ、また敬語になってしまった。

しかもあんまり嬉しかったので、彼女がいつも乗る電車が行ってしまったのに気付かなかった。

それでも冬さんは怒らずに慰めてくれた。

少しだけ話をして、携帯の番号とアドレスを教えてくれた。

なんていい子だ。

オレは幸せな気持ちで業務を始め

昼に発生した強盗事件で、犯人に撃たれて死んだ。

やっぱり今朝のは死亡フラグだったのか。そうだな、オレが幸せなんてへんだもんな。二階級特進バンザイ。しくしく。

さいごに一言。

「なんじゃこりゃあああっ (by 太陽にほえろ。実物見たことないけど)」

そんで。

転生した。

プロローグ（後書き）

……タイトルの『銀のプレートメール』にたどり着くまで長いかもしれません。

できれば、気長にお付き合いいただけると嬉しいです。

1 乳幼児。

そんで。

転生した。

なんか、あの世で閻魔大王えんまに会った気がする。

あと、いらぬオマケをそのままくつつけられたのは覚えてる。
ラック値の欠けているオレを憐れんで便宜べんぎを図ってくれるなら、
オマケじゃなく冬さんをギブ。

……冬さん。もう会えないんだ。

生まれた直後はそれが悲しくて大泣きした。しばらくたってから
も男泣きに泣いた。

だって始めて女の子と付き合えそうだったのに。まあ、オトモダ
チからだっただけ。

恋愛理由で泣く赤ん坊ってどんなだよ、と自分でも思うが。
悲しかったんだから仕方がない。

それはともかく、生まれ変わっても現代日本の基礎知識は残って
いた。

有効そうなところで、「海外派遣編：井戸の作り方」や「サバイ
バル」「野草・薬草」。

警察の試験に落ちたら、自衛隊に応募しようと思っていたので読
んでいた。

これをチートというのだろう。
剣と魔法のファンタジーな世界でも通用するはず！

自分で歩けるまで、死なないでいたらね。

それが目の前の問題。

実は、恋人未満の冬ちゃんと死に分かれたのを泣いている場合じゃないのだ。

オレは生まれてこのかた、満腹するまでミルクをもらった事が無い。

母の乳の出がよろしくないのだ。中世ヨーロッパ風の社会では農民の地位がめっちゃめっちゃ低く、そして父親と母親は完璧な農民デス。

という事で、命の危機。まったり寝ていられないオレは、驚異的なハイハイを身につけた。

「きゃー、マグナスったら何してるの」
姉が叫んでいる。ちっ、見つかったか。

洗濯物を放り出して追いかけてくる姉から逃れるべく、方向転換。藪やぶに隠れて匍匐ほふく前進ぜんしんなんてしてる余裕はもうない。直線で、目標物【たんぽぽ】！

花をぱくつとやったところで、姉に捕まった。

「食べちゃ駄目っ」

ぺしつと、犬が食べちゃダメな物を食べた時のようにはたかれた。しかし飲み込んで、次はヨモギに手を伸ばす。むしって口に入れようとすると、姉が手を押さえて、拮抗きっこうにらみ合う。

「あー（少量なら、赤ちゃんでも平気だと思っけど）」
「あー、じゃないの!」
「だー（本当はてんぷらにすると美味いんだけどさ）」
「だー、でもなくて!」

オレは姉の腕の中で、ひよいと態勢を入れ替えた。
柔らかい体は、丸くなるだけで簡単に腕の下へ落ちる。姉はびっ
くりして手を離れたので、ヨモギを飲む。あとはクレソンだな。
川近くまで、高速ハイハイ。
歯がないので前二つは食べにくかったが、これは歯茎ですり潰せ
た。うん、けっこう平気に食える。

座りこんでもしやもしややっていと、姉が膝を抱えて泣きだした。
「…………ごめんね。お腹すいてるのよね。うちが貧乏だから。ごめん
ね」

「…………」
オレはクレソンを摘むと、姉の前に這って行って差し出した。
腹が減ると、大人でも泣きたくなるよな。
「あー（サラダに乗ってるヤツだから）」
鼻をすすりながら顔をあげた姉は、ぱくりと食べてくれた。

2 幼児。

親は朝早くから起きて畑の世話をしているので、子供のオレを育ててくれたのは兄と姉である。うーん、お百姓さんってエライ……というか、たいへんだな。

農業用機械の原理も覚えてくれれば良かったと、後悔。

「……」

よし、後悔終了。

できる事からガンバロウ、って標語もあつた気もするし。まずは毎朝飲み水を汲みに行く姉のため、井戸にポンプを取りつけよう。水汲みは重労働なのだ。

満一歳にしてハイハイを卒業、先日から二足歩行をはじめたオレは、よちよちと井戸に近寄って行った。

「あらマグナス。ケイトはここじゃないわよ」

「あー（知ってる。川にクレソンを取りに行った）」

オレが異常にクレソンに執着するので、このごろ姉は自発的にクレソンを摘みに行くってくれる。塩だけで簡単おひたしになるので、空腹な家族にもギリギリ好評のラインだ。

それにしても、なんでこの人たちって野草食べるの嫌がるのかな？

おかずが一品増えたら嬉しくない？

それはともかく、じーっと井戸を見ていたら、広場が騒がしくなった。

「何があつたんだい？」

水を汲んでいたおばさんが、ざわめきの方へ大声をかける。

「イノシシが出たんだってさ。男衆が倒したってよ。今日は焼き肉よーっ」

焼き肉！！

オレは立ち上がると、一生懸命広場へ走った。

まだ頭がでかすぎてバランスがうまく取れず、一歩ごと右へ左へ揺れるのは大目に見て欲しい。

「だー（にーちゃん）」

近付いて行くと、先に来ていた隣のおばさんが抱き上げてくれた。イノシシ獲つたどーな浮かれ騒ぎだけでなく、もっと切羽つまつた動きもある。

「ヨシユアがケガをした！ 森の治療師を呼んで来い！」

「木地師が森でケガなんて、他に獣が出たのか？」

「いや、元から体調が悪かったらしい。手負いのイノシシにやられただけだ」

ほつとした空気と緊張が交錯し、慌ただしく何人かが走っていく。

「こんなところに来て、危ないじゃない。踏まれちまうよ」

「あー（ありがとう）」

オレの気持ち伝わったのか、おばさんはぐりぐりと頭を撫でてくれた。どういたしまして、と言いなから兄へ近寄る。

「ジョージ、マグナスがおめでとうってさ」

「おう。見るよ、マグナス。兄ちゃんが獲ってきた、久々の焼き肉だぞ」

兄ちゃんサイコー。

もちろん肉は大好きだ！

きらきら目を輝かせたオレは、盛大なよだれをたらして集まっていた人々に大笑いされた。

「おまえん家の弟、ホント食い意地が張ってるよな。草喰うんだろ？」

「うー（クレソンをばかにするな。整腸作用だってあるんだぞ）！」

「ジョージも狩りに参加したし、ロボートの家のはいいところを切り分けてやれ」

両手を振り回すオレの抗議に笑った村長は、肉を解体しているおじさんに声をかけてくれた。

村長、なんてイイ人なんだ。

いつか恩返しさせていただきます！

オレがきゃっきゃとはしゃいだので、村人はまた大笑いした。

夕食にはもちろん肉が出た。

もちろん付け合わせのクレソンも。

「マグナスのおかげで、いいお肉がもらえて良かったわねえ」

「そうだけどさ。母さん達、そもそもオレが狩りに参加してたからだって、覚えてる？」

「お兄ちゃんって困あつら？」

「それはハル。今年のオレは弓使いだ」

「ほう。当たったのか？」

「もちろん」

珍しく食卓が賑やかだった。

まだ歯のないオレは一かけらをしゃぶるだけだったが、十分に楽しかった。

保存分の肉にハーブと塩をぬって、家族を呆れさせたくらい楽しかった。

肉に浮かれ過ぎてポンプをすっかり忘れていたのは、ベッドに入ってから思い出した。

3 マグナス最初の事件簿1 (一歳半)

木地師のヨシユアがケガをしたと聞いたので、オレは見に行つた。今日も頭が大きくて、歩くたびによちよちと左右に揺れる。ああ情けない。早く人間おとなになりたーい。

「おや、お見舞いに来てくれたのかい」

ヨシユアの母親が、ドアを開けようと背伸びしていたオレに気付いて中に入れてくれた。

「あー(大丈夫か? 具合はどうだ?)」

兄と同じ年のヨシユアは、床に座りこんだオレを抱え上げてベッドの上に座らせた。

「いてて……。お前、ホントおもしれーなー。うちのアリアなんて、お前より半年早く生まれてんのに家の中這うのが精いっぱいだ」

「むー(それが普通だ。それより、ケガは?)」

答えはなく、頭を撫でられた。

こいつは姉と違って、こっちの言いたい事を分かってくれない。仕方ないので、足からはじまって肩までぺしぺし叩いてやった。

ヨシユアは太腿ふとももと腹のところで思い切り顔をしかめた。

ケガはそこか。

シーツを剥いたら、シャツやズボンにまで血がにじんでいた。

特に太腿が問題。うわ、そこ動脈の近くだ。あぶねー。一歩間違つたら、出血多量であの世行きだ。

「……?」

オレは腹側の、血と共ににじんでいた膿うみに鼻を近づけた。

傷は小さいが、スゴイ臭いだった。
太腿はまだ膿んでないのに。
たった一日でこんなに酷ひどくなるはずがない

*

「……………」
オレは薬になる草を探して村の囲いの外へ出た。

目当ての白い花はすぐ近くに咲いていたが、不幸にして背が届かない。まったく、全然、背伸びとかジャンプとかも無理。論外。

なので、オレは今のオレにできる手っ取り早い方法をとってみた。
つまり。

号泣。

びえええええ　　と泣く。肺活量限界まで、泣

き叫ぶ。

やがて、声を聞きつけた姉が走ってきた。

「マグナス！」

「うー（ごめんな姉ちゃん）」

「……………」

けろりと泣きやんだオレは、木の幹にしがみついて叩いた。

「…………登りたいのね？」

うなづく。

姉は、あきらめの境地で枝に乗せてくれた。幸い体重が軽いので、枝の先まで行ってもしなる程度だ。オレは一塊りになって咲いている花を採り、姉の肩に降りた。

「また食べるの？」

首を振る。

「あら珍しい。じゃあ、どうするの?」

「あー」と、オレは肩車のまま家を指さした。

走ろうとして、転んだ。

この使いにくい体、どうにかならないかな。

普通のごどもなら大泣きするところを、オレは腹をたてつつ起きてぺちぺち鍋を叩く。

もはや一歳児とも思えぬ奇行に慣れた姉は、鍋に水を入れて暖炉の火を起こしてくれた。

「やっぱり食べるんじゃない」

「うー」と首を振る。その間も、瓶をとってきて姉に渡す。

「……洗うのね?」

ため息をつかれた。

気にするなつて。物分かりのいい姉を持って、オレは幸せだ。

4 マグナス最初の事件簿2 (一歳半)

助手を最大限に活用して、瓶を熱湯消毒し、採ってきた花をつつこんだ。家にあったミントも。

その上で、瓶に炭酸水を注ぐ。

本当はアルコールと蜂蜜も入れたかったが、高いので無理。

ちなみに炭酸水は、山のふもとまで行くと汲める天然物である。

温かかったら炭酸温泉になれるのに、残念ながら冷たくて入れない。胃腸病に効くので、どこの家でも汲み置きがある。

「食べるんじゃないで、飲むの？」

「ぶー(よっぽどオレって食いしん坊のイメージ?)」

オレは一度頷き、それから首を振った。ああ、めんどくさい。明日から発声練習でもしようかな。

今からでも普通にしゃべれると思うけど、家族や村人に慣れてもらわないといけないし。

「あー(とりあえず、片付けて)」

瓶詰の白い花 アンゼリカという にフタをし、オレは姉を見上げて棚を指さした。

「はいはい」

心得た姉は、埃のない場所にかたづけしてくれた。

「でっ」

「う(終わり。ありがとう)」

ペこりと一礼すると、腰に両手をあてて偉そうだった姉が笑いだした。一歳児が手を揃えておじぎするのが、彼女のツボらしい。

……アンゼリカの薬ができあがるのは、早くて明日だ。
暇ができて、オレは考える。

こうして姉の家事を邪魔するのは良くない……あ。そうだよ、だから井戸にポンプつけようと思ったんだ。忘れてた。

オレは姉のスカートを引き、外に出た。地面に図面を書くと、姉が上からのぞき込む。

「なんの絵？」

オレは井戸を指さした。

それから図面の取っ手部分を示し、ゼスチャーしてみる。図面の口から水が出るのも描き加える。

「……水が、出るの？」

さすが姉ちゃん、これだけでよく分かったな！

オレは拍手したが、姉の顔色は悪かった。

真剣に肩に手を置かれた。なに、一歳児にマジ説教ですか？

「マグナス、みんなで使う物にいたずらしちゃダメよ。いいえ、いたずらどころじゃないわ。そんなの見つかったら、教会になんて言われるか。異端者だと思われたら殺されるのよ。いい？ 絶対にこんなの描いちゃダメ」

……え？ ええつ？

なにそれ科学ダメって事？ 魔女狩り逆バージョン？

ぎゃー、いやだー。まだ子供だし、ろくな抵抗もできないぞ。

怖くなったオレは、カクカクと何度もうなずいた。

姉の手伝いは、他の事でしょう。それに考えたら、真空状態にできるだけの技術がオレに無かったしな。

で、次の日。

「こんにちはー」

「まあ、今度はケイトかい。ヨシユアのために悪いねえ」

「いいえ、昨日はうちのチビが勝手に邪魔しちゃって、こっちこそごめんさない。それで、これ、差し入れてもいいかしら」

姉は、アンゼリカの瓶詰を差し出した。

「なんだい？」

「『魔女の霊薬』っていうんですって。魔を退^{しりぞ}けて、病気を治すお薬」

仰々(ぎょうぎょう)しい名前に、おばさんが目を丸くした。

「なんだってそんな物。治療師でさえくれなかったのに」

「マグナスが」

おばさんの視線が、スカートの影になっていたオレへと降^{くだ}ってきた。

微妙な沈黙。

「大丈夫。塗り薬とかじゃなく、飲み物なんですって。あたしも飲んでみたけど、美味しかったわ」

「ああ！ 飲み物が、なるほどね！」

一気に明るくなったおばさんは、木製コップを持って来てくれた。もちろんヨシユア作だ。

……疑われたり怖がられなかったのはいいんだけど、ナニこの落差。なんでオレ、食糧ネタだと大笑いされんだ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2046z/>

これはテンプレですか？ いいえ、銀のプレートメール略して銀プレです

2011年12月11日17時47分発行